

傷寒・金匱方劑解説 55 きー7

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
きー7	<p>耆芍桂酒湯 (黄耆芍薬桂枝苦酒湯)</p>	<p>黄耆 (甘微温) 5g・芍薬 (苦平) 3g・桂枝 (辛温) 3g                      上の3味を食酒 40ml と水 280ml とを混ぜたものを煮て 120ml に煮詰め、40ml を温服する。そうすると胸の辺りが苦しくなるはずである。服用して6、7日経つと解するのである。もし胸苦しいのが止まらないのは、酔がはばんでいるからである。                      苦酒は酔のことであるが、新古方薬囊には陰気を助けて広がっているものを正常にする作用がある。</p>
	水気病脈証併治第十四第 30 条 (金匱要略)	
	<p>「問うて曰く、黄汗の病たる、身体腫れ発熱し汗出でて渴し、状風水の如く、汗衣を沾し、色正黄なること薬汁の如く、脈自ら沈、何に従てこれを得。師曰く汗出ずるに水中に入り浴し、水汗孔より入るを以て之を得。耆芍桂酒湯之を主るに宜し。」</p>	
	<p>い、く、か、た、ち、う、る、お、ば、く、じ、ゅう、よ、り、も、つ、て、も、つ、て</p>	
	<p>解説 お尋ねしますが、黄汗の病というものは、身体がむくんで発熱し、汗が出て、そして咽が渴く、その病状は丁度風水の様である。汗が着物を潤すと、その色は真黄で、まるでキハダを煎じた薬汁の様である。そして脈は自然に沈となるが、黄汗の病はどうしてなるのですか？                      師が云われるには、汗が出ていて熱いので、水浴をして、そのために汚い水が汗の孔 (エクリン腺) から入って、それでこうなったのである。この様な場合には、耆芍桂酒湯 (黄耆芍薬桂枝苦酒湯) が一番よいのである。</p>	
	<p>耆芍桂酒湯 (黄耆芍薬桂枝苦酒湯) 証                      新古方薬囊によれば「全身に腫みがあり、熱を出し汗が出て咽が渴き、その腫みの様子は風水に似ているが、汗はキハダの煎じ汁のように真黄色で脈が沈んでいる。然も此の病氣は夏の暑い時、汗が出ているのに水中に入って水を浴びた為、冷水が汗の出る孔から浸入して發した者である。」と記されている。</p>	